

～ 抄 録 ～

〔論 説〕

イギリス工作機械産業の分析

鈴木 孝 男

この論文の狙いは、近代産業の発祥地であり、機械技術の発展に大きな功績を挙げたイギリスにおいて、工作機械産業が現在どのような形で存立しているかということ进行分析することである。

イギリスでは18世紀に産業革命における機械技術の発展が見られたが、その基礎を作ったのが工作機械産業である。19世紀に互換性部品生産方式がアメリカで発達し、新しい工作機械が開発されたが、イギリスの企業は新技術への対応が遅れ、以後アメリカやドイツ、そして最近では日本、イタリアなどの後塵を排するようになった。

現在、イギリスでは製造業が第3次産業に比べて規模が縮小しており、その影響を受けて工作機械産業も縮小過程に入っている。その中で主要企業の動向を見ると、大手企業はほとんど外国籍企業であり、イギリス籍企業は狭い分野に特化して生き残りを図ろうとしている。

貿易面では輸入が輸出を上回っており、特にEUとの貿易では低価格部品を輸出して高価格品を輸入する傾向がある。大手企業の輸出比率は80%前後と高く、国内の製造業は高性能の機械を輸入に依存する傾向がある。

地域的集積では、産業革命の中心地であったミッドランドに多くの企業が集まっているが、集積のメリットを発揮するような企業間の連携や競争は見られなかった。ただ、この地域に立地する大学の工学分野との提携が盛んに行われており、この点は集積の効用として確認することができた。

ポンドがドルやユーロに対して高い状態が続いているので、今後もイギリス工作機械産業は厳しい状況が続くことになろう。

現代救急医療とその展望

—小児救急医療の現状と21世紀に向けた救急医療政策の提言—

鈴木 哲 司

わが国救急医療システムは、社会変遷の中、社会福祉サービスの一貫として公益性を維持しつつ、医療の平等性を根底として発展してきた。しかし、救急医療の効率化と円滑化という経済的観点がクローズアップされるにつれ「医療の平等性」「経済効率化」などが抜本的に再考を促されている。少子・高齢化社会という未曾有の人口構造変化はこの問題を加速させる。

現代救急医療は多様かつ重大な問題を内包する。医療一元化における行政間軋轢や救急救命士の医療行為拡大を巡る内部対立、生命倫理と現実経済とのジレンマなど難問が山積している。「救急医療の効率化」に加え「救急医療の質向上」も並立的に考察対象とすべき重要案件と言える。

救急医療における民営化論の高まりはわが国救急医療システムに微細な法制度の見直しではもはや解決出来ぬ、構造次元レベルでの変革を要求する。しかしながら民営化は救急医療において「提供する側の論理」から「提供される側の論理」へのパラダイムシフトである。つまり「医療の公益性」というものが主軸議論となる。本稿に於いては、変革期を迎える現代救急医療のあるべき方策を考察し、具体的方法論を展開する。

〔研究ノート〕

ソフトウェア企業の財務的一考察

—倒産事例を中心として—

嶋 根 進

一般的にソフトウェア企業は知識集約型産業で紙と鉛筆があれば仕事になり、生産設備に該当するものは人であり有体物を持たないところに特色があるといわれている。

その他の特色としては、一点は、建設業に似てメーカーやユーザーを中心とした上流（設計を中心）から下流（プログラム製造を中心）までの分業体制となっていること。また二点目は、ソフトウェアには特定ユーザー向けのオーダーメイド的なものと、汎用性を持ち、多くのユーザーが利用できるように作成された既製服的なものがある。業界の特色としては以上が指摘され、先端企業としてのソフトウェア会社は財務内容について不透明感がみられる。

そこで、本稿では、ソフトウェア企業で店頭市場に上場された後に倒産した2社を事例としてとりあげ、有価証券報告書等を用い財務的特質を明らかにし、ソフトウェア会社を会計的見地から他業種との比較分析を行い、財務的視点を踏まえつつソフトウェア会社に対する経営政策への提言を試みた点に本研究の特徴がある。

産業革命黎明期における外注見積原価計算 —チャールズ・バベッジの所説を中心として—

新 川 正 子

本稿は産業革命黎明期の英国に生き、数学者であり世界最初のコンピューターの開発者でもあるチャールズ・バベッジ焦点を当て、彼の外注見積原価計算の研究を進めた。彼の著書『機械及び諸工場の経済について』は、古典的な名著であるハットフィールド著『ハットフィールド・近代会計学』でも言及されている。筆者は彼に関心を持ち、その著書を調査し、書籍の原価計算であることが認識できた。そこで彼の大きな業績の一つである書籍の外注原価計算を研究することで19世紀初頭における外注見積原価計算の実態を明らかにした。筆者は外注費がいつ頃から存在したのか、どのようなものであったかに歴史的な関心があり、本研究を進めたものである。

企業経営は、何よりも原価管理が最優先する。その管理は、標準原価計算を取り入れた管理と原価低減がある。バベッジの原価計算は全社的な原価低減である。書籍の原価計算もその一例である。彼はその著書で、科学的思考過程を経ることにより原価低減ができるという重要な提案をしている。書籍の原価計算、ひいてはバベッジの原価低減の理論は、デフレ経済下の、現在のわが国にも通用する理論であり、本研究を進めた最も大きな理由の一つである。

明治の企業家 杉山徳三郎の研究
創成期の大津造船所と兵庫製鉄所について
—徳三郎史料による史談会資料の検証—

杉山 謙二郎

企業家史を構築するに際して収集する史料は、既に一般的に受け入れられている経済史上、産業史上の概念やその基となる史料の検証に有効である。本小論は琵琶湖の湖上交通と兵庫の兵庫製鉄所（加州製鉄所）の濫觴に関する基礎的史料「後藤報告」（『史談会速記録』）の史料としての信頼性を徳三郎関係史料によって検証したものである。これによってこの二つの産業の創成について、ある程度の史実に沿った再構築が可能となったと信じるが、この作業は同時に明治の企業家杉山徳三郎自身が、長崎製鉄所所属の地役人から文明開化の新しい時代の担い手たる技術者として、独立した歩み始める最初のステップについて光を当てる作業でもあった。本検証を通して黎明期の産業の成り立ちや維新时期を迎えて高いアスピレーションによって動かされた人々の姿に接することが出来る。